4 対談 アジアの伝統音楽・芸能公演の現在と未来 ——私と公の間から

久保田広美：（株）マノハラ代表取締役
長谷川時夫：NPO法人日印交流を盛り上げる会代表
（きき手）小日向英俊：東京音楽大学客員教授

※ 2019 年 8 月 25 日（日）基礎講座の 1 講義として実施

1 はじめに

小日向　では，始めさせていただきます。私はコーディネーター役で少し質問するだけで進めたいと思います。最初に，久保田広美さんです。株式会社マノハラ代表取締役として，主にインドネシア，東南アジア関係のコーディネートや企画イベント等々に関わっていらっしゃいます。この対談のタイトルにも「私」と「公」という言葉がありますが，個人の文化に対する興味からこうした仕事を始めたのではないのかと思いお願いしました。もうお一方が，長谷川時夫さんです。インドの文化や音楽のイベント，それも非常に大規模なものを長年継続していらっしゃいます。またミティラー美術館の館長として，インドの民俗美術の日本への紹介者でもいらっしゃいます。

2 インド文化との出会い

小日向　インド音楽やインド文化に関わるきっかけをお聞かせいただければと思います。

長谷川　私の高校時代，モダンジャズの巨匠ジョン・コルトレーンがフリー・ジャズに入ってしまいました。私は，その音楽を聞いて感動して，買いましたですね。浅草向柳原町に住んでいましたが，それでテナーサックスを買って，ジョン・コルトレーンのように 8 時間吹かなければいけないと一生懸命やりました。

もっと先端をいくには，やっぱりお経だと思い，それを使った即興もやりました。自分にとってお経という音楽があらゆる世界の音楽の中で最も心にしみるものです。心にしみる音楽を，自分で自分がいいなというものをフリー・ジャズに負けずに，しかもお経のよさがあって同時に日本文化に通じる音楽を探すと無いので，自分で作るしかないということになりまして，即興グループのタージ・マハル旅行団に参加しました。彼らとヨーロッパを回って，外の国から日本を見た後は，月も見られないところに江戸っ子が住めるかと思い，新潟の山の 4 メートルも雪が降るところで暮らし始めたといういきさつです。8 年ぐらいしたら開発計画があったので，反対をしたら勝ってしまいました。

私たちの音楽ファンたちがメディアに結構いたものですから，カメラが飛んできたりテレビに出たりしました。「廃校の小学校を使って宇宙観を基本とする社会教育に使う」などとわけのわからないことを言って，それを借りました。それで偶然紹介されて気に入ったミティラー画を集めて，5 年にして世界一のミティラー画のコレクションを作りました。インド政府からも評価されて，1988 年に 3 億円集めた日印交流で一番大きなフェスティバルの事務局長補佐になりました。

このとき，北は網走市立美術館から沖縄の与那国島までミティラー画を持っていきまして大変評価されました。その後，インド大使館につかまって，今のインド政府が日本でやるもの，あるいはインド政府が派遣する舞踊団のほとんどを，新潟の山奥の私がやることになりました。残念ながら，暇な人が日本にいないみたいで（笑），結局，

私のところに来るんです。

小日向　いろいろな経緯がありますが，最初，音楽というよりは，むしろインドの民俗美術の紹介ということが最初だったのですね。

長谷川　そうですね。インドとの関わりは。

「ナマステ・インディア」について

長谷川　日本も，今の政治家たちの顔を見たって文化の顔をしていないでしょう（笑）。だから予算も，文化庁の予算は 1,000 億円って知っています？　1,000 億円が小泉内閣のときに倍ぐらいにした額です。そこから 20 年ぐらいずっと 1,000 億円ですよ。組織だって，庁のままですよ。で，首相の参与に誰も文化はいないです。Nothing なんです。日本も，まだ侍のころからやっと百五十数年。経済をまず上げた。だから，これから文化を打ち出さなきゃいけない。では，文化をするときに何が大事かというと，西洋の後追いではなくて，アジアの，あるいは日本の深いものから新しいものを作っていくために予算を投入しなければいけないです。何の話になっちゃったかな（笑）。

小日向　話が発展してまいりましたけれども，少しもとに戻りまして，インドではなくてもよかったかもしれないけれども，文化のことを長谷川さんなりに考えたということで，そのうち実際にはインドの文化の紹介に非常に関わっていらっしゃいますよね。その中の代表が，私が見るところでは，このチラシにありますが，「ナマステ・インディア」という非常に大規模なイベントになります。どのようなコンセプトで「ナマステ・インディア」が行われているのか，また，実際にイベントをやるに当たり，何か非常にご苦労があるとか，そういった点をお話しいただければと思います。

長谷川　まず，インドが開放政策に打って出たのが 1991 年です。日本商工会議所の中でインドへ進出しているトヨタやスズキ自動車や，三井物産とかが入っている日印経済委員会が「ナマステ・インディア」を始めたのが 1993 年でした。

始めたけれども，文化を知らない経済委員たちがやるわけですから，そこで日本で唯一のインドの美術館を新潟で運営し，国家サイズのイベントにも参画した私が呼ばれてヘルプすることになりました。ところが日本経済が 20 年も停滞する中で，2004 年にやめることになりました。このままやめたのではもったいないというのでいろいろな団体に声を掛けるけれども，みんな無理で……私が清水の舞台から飛び降りる感じで新潟の山奥に住む人間がこれを引き継ぎました。今，代々木公園で 2 日間に 20 万人を超える来場者があるイベントに成長しました。これはインド国外では世界最大級です。

日本は 3 万 6,000 人しかインド人は住んでいないのです。なのに，なぜ日本で世界一のイベントを開催しているのか。それはインド人のコミュニティーたちの横のつながりがあまりないからということが大きいと思います。でもやっぱり，イベント自体に魅力があるんです。

例えば張りぼての大型像とか，素焼きのテラコッタの等身大の馬だとか，みんなが来てびっくりするようなものを山の中でつくった美術館から 4 トン車で持ってきます。イベントが終わった後は，夜中の 12 時に新潟へ向かうのは僕なのです。4 トン車 3 台で，1 人は私の息子と，もう 1 人とで搬出します。

また，500 弱の少数民族・先住民がいる多民族国家インドと日本が交流するのに，日本の先住民族と認めたアイヌ文化を入れないではおかしいじゃないかということで，もう十何年来てもらっています。お金は，今まで出ていた文化資金からはもう出ないです。けれどもアイヌの方が，今まで呼んでくれたのに，お金が出ないからといって自分たちが出ないなんていうのはアイヌらしくないということで，自腹を切って，我々も一生懸命つくって助けながら，出てくれています。

そのうち「長谷川さん，インドに行きたいんだ」と言うから，「そうですか」で，交流基金からお金をもらって，インドで 3 公演やりまして，21 名で行きました。アイヌ民族史上初めてとい

うふうに財団から言われました。私の本気度を感じてもらいたいです。

小日向　ありがとうございました。

長谷川さんの今までの活動，いろいろなイベントをなさっているのですが，ほとんど手弁当みたいな感じでやるところも多いということがよくわかりました。

マネジメント組織

小日向　では，久保田さんのインドネシア，東南アジアのお立場から見て，長谷川さんに聞きたい点はございますか。

久保田　私が会社を立ち上げたのが2006年です。インドネシアの文化・芸能を中心に仕事を始めたのですが，その前には常に何歩も先にインドがいました。もう「ナマステ・インディア」も回を重ねて大盛況でやっていらっしゃいましたし，長谷川さんのお名前も私は存じておりました。インドの公演はほんとうに人も入るし，プログラムを見るといっぱい協賛がついている。インドネシアでこれが何でできないのだろうと思いながらインドの後を追いかけていたようなところがあります。「インドネシア・フェスティバル」もやっていますが，それほどは大きくはなっていないです。これだけの大きなイベントを，新潟という土地に住みながら人を動かして実行するとき，実行委員会形式なのかどのような形でつくられているのかが非常に聞きたいところです。

長谷川　私は，既成にとらわれない。私は，「ナマステ・インディア」の商工会議所がやる会議で最終的には事務局長みたいになりました。けれど，そこにいる人たちのさまざまな意見はごもっともですけど，ほとんど役に立たない。

つまり予算があってできるはずなのに，本気になって日本とインドはどうしたらいいかなと悩むような人って，いないですよ。だけど，委員会をつくらないと個人がやっているのではないかと言われ，これもマイナスです。ということで，「実行委員会」とはなっています。

もう一つ，私はなんだかんだ言われても平気です。というのは，山に行って8年後に開発計画に反対したわけだから。物事をやるには，卓越した物の考え方がないとだめなのです。それには三つの大事なことがあります。一つはアフリカのようなものが大事。座っていないでちょっと動いたりジャンプしたり，いいじゃないというぐらいのことってものすごく大事です。

もう一つは，こうやってしっかりと堅いけれども，とにかく次へ向かって形づくって資料をまとめて何かしていく，これも大事。

最後は，アジアの文化だし，一期一会ですよ。あなたとは二度と会えない。長谷川時夫の話は二度と聞けないかもしれない。命がけで，今，出会っている。これがものすごく大事です。

この三つ，どっちにも入り込まないで，どっちにも最先端まで常に行けるように，そういう自由さを持つのがすごく大事。つまりマネジメントで一番大事なのはそこです。この三つの世界を自由に行き来することが，この世の中に生きるのに，感性からして，美的なものからして大事だというのが一つあるのです（笑）。

久保田　ありがとうございます。

3 インドネシア文化との出会い

小日向　では久保田さんに，東南アジアのイベントに関わる経緯ついて伺いたいと思います。

久保田　私は成城大学の芸術学科出身で，東洋美術専攻でした。大学3年生のときに父のジャカルタ転勤とともにインドネシアに行ってみようと……で，インドネシアの二つの大学でまず語学を学び1年間過ごしました。帰国後，復学し，インドネシア更紗で卒論を書きました。卒業後，世界に関わる仕事がしたいと思って旅行会社に入りました。東南アジア専門のランドオペレーターでした。仕事ではビザ申請から手配業務まで全部やっていました。それが今の仕事の経験につながっていると思います。でも会社では，売上も考えなければいけなくて，文化とか芸術だけを紹介するわ

けにはいきません。不本意なことも多くて，会社をやめてもう一度大学院に行って，美術・芸術に関わる仕事を改めて目指そうと思いました。博士課程まで4年間ボロブドゥールの仏教遺跡の勉強をしました。いろいろなムードラや踊り子の姿が描かれていたり，楽団の姿も描かれています。現代の文化，芸術，芸能との関係を担当教授から聞かされ，ジャワ舞踊も始めました。

小日向　その後，実際には株式会社を立ち上げるということになるわけですが，すぐですか。

久保田　そうですね。大学院の卒業謝恩会で，私の演劇学の先生，イプセン翻訳家の毛利三彌先生から，イプセンの物語を現代能の形で上演するインドネシア公演を手伝うよう言われました。「ではわかりました」とお引き受けしてから，そのまま会社にしたほうが身動きも取りやすいかなと思いました。ちょうど会社法が変わって，会社を作りやすくなった年でした。

イベントとコンテンツ

小日向　それ以降，いろいろなイベント，それから実はいろいろな音楽の制作についても関わっていらっしゃるし，その成果はYouTubeで見られますね。更紗の展示とかにも関わっていらっしゃいますね。非常に多様な活動があると思います。その中で一番メインなのはインドネシアということでしょうか。それとも他にも広げるとか……。

久保田　現在，視野を広げてということまでには至らないです。インドネシアにも民族が350いて，1万5,000の島々があって，ほんとうに多様な芸能があって，まだまだインドネシアについて私ができることは終わりがないというか，特にほかのアジア圏にというのは考えてはいません。ただ，お仕事として制作の現場で入ったとき，最近では多国籍な国際共同制作の現場もほんとうに増えていて，自分がまとめ役になる現場の中に，マレーシア人，シンガポール人，台湾の人，インドネシア人もそうですし，多様な人たちと一緒にお仕事をする機会が増えています。

小日向　また，さまざまなイベントの中には，インドネシア現地の伝統的なパフォーマンスとか舞台をそのまま日本に持ってくるだけでなく，むしろ現地のコンテンポラリーといいますか，新しい動きを紹介するようなイベントもあるように思いますが，それにはどんな経緯がありますか。

久保田　インドネシアも，伝統芸能がもちろん根強く残っています。ただ最近は，コンテンポラリーダンスとか，ヒップホップとか，ストリートダンスと，そういう方向にどんどん若者が流れていっている動きがあります。

ただ，彼らも芸術大学で伝統的なものを学んだ上でコンテンポラリーダンスに移っていくので，ただただコンテンポラリーができるというよりは，もっと深いところに自分の国の伝統意識を残しながらコンテンポラリーに取り組んでいます。今一番新しいこの形を日本で見せてほしいという問い合わせもあります。日本で公演できる場所はないかとか。

スケジュールと予算

久保田　「1カ月後ぐらいに，助成金をインドネシアで取れそうだけれども，何か出られる舞台，ない？」とか，「1カ月前に言われても出られるところはないよ」みたいなこともあります。

小日向　日本側とすれば，実務的にはちょっとタイト過ぎて実現できないという難しい要請がありますよね。そういうときはどうしますか。

久保田　日本でインドネシア関係の芸能団体が何か公演をするとか，ちょうど1カ月後に何かあるとか，3カ月後ぐらいだったらまだいけますか，ライブがあるからそこだったら出してあげられるかなとか，そういう相談はすることはあります。

かつてインドのシタールの方が急に来たいと言って見えて。で，急遽，ガムランの方に，インドからこんなすごいシタールの演奏家が来るので何か企画をしてもらえませんかというふうに声をかけて，ランバンサリのスタジオでシタールとタブラの演奏会をやったことがあります。

小日向　なるほど。大きなホールだけではなくて，タイトなスケジュールなら自分のネットワークを通じて場所を確保して予算も何とか工面するというような形で実現しようということですね。

久保田　はい。

小日向　そういう場合にも，会社なのでいわゆる営利法人としての会社の維持と，営業的に見ればタイトな予算（バジェット）というものがどのように折り合いがつくのかなとか思います。差し支えない程度でお聞かせいただけますか？

久保田　皆さんのお手元の資料は2007年から2013年の資料になっていますが，多分，規模も小さいものも多いですし，これ以外の仕事ももちろんあります。普通にイベントのお仕事もあります。基本的にはやっぱりもうからないと言うとあれですね，利益はなかなか上がりにくい……ほんとうに情熱と，どうしても伝えたいという思いがないと，なかなか成立しないことが多いです。

小日向　長谷川さんも含めて芸術に対する非常に個人的な熱意とか，それから久保田さんであればジャカルタの経験があり，インドネシアのさまざまな伝統やコンテンポラリーのすばらしいものを日本に持ってきたいと，そういう，いわば私的な情熱というかな，そういったものが背景にあるように思います。でも実際にそれを日本で提供するときは，長谷川さんの場合はちょっと手弁当的なところもあり，そして久保田さんの立場では，ぎりぎりではあるけれども何とかやっているみたいに感じています。また，マネジメントで非常に関わりがあるのがファンドですね。国際交流基金があったり，文化庁であったりして助成金とかそういったものの申請とかですね。今までのご経験の中で，そういった公的な組織とか制度とかが助けになっている，あるいは逆に何か障壁になっている，そういう例はございますか。

久保田　そうですね，多分どこも共通だと思いますが，例えば日本インドネシア国交樹立年とか，周年事業の年は助成金も優先的に採択してもらえます。そういった意味では，周年事業がある年は積極的に出すことにはしています。

2008年が日本インドネシア国交樹立50周年記念だったのです。この年はほんとうに非常にイベントが多くて，インドネシアの更紗展が日本全国を巡回するということがあったので，それに関連するイベントをやりました。更紗をただ単に布として見るのではなくて，身につけて踊って，身につけられて見る，物を見ることで展示されている作品への理解もより一層深まるだろうと考えました。その年は更紗とジャワ舞踊の公演みたいなものをたくさん企画しました。こういう場合は美術館の企画のイベント予算が取れているので，提示された予算の中でできることを企画します。

また，2008年は尺八の公演をジャカルタでやりました。このときは国際交流基金の助成をいただきました。70パーセントぐらいだったと思います。ただ，今，70パーセントいただけるのが，だんだん50パーセント，40パーセントになっているのではないかなと思います。

4 マネジメントのあれこれ

小日向　長谷川さんから久保田さんに何か質問はございますか。

長谷川　よく頑張っていると思います。

久保田　いえ，世代は全然違うし，ほんとうにご経験が豊富で。

長谷川　私の場合は，だから文明とか文化とかというところで音楽もやってきたので，欧米後追いっぽい世界の中で，こういう民俗芸能というのはすごく大事に思います。

2006年12月頃，日印交流年開会式にいらしたインド首相マンモハン・シンご夫妻を，当時の安倍首相が首相官邸に招待したときのことです。インド大使館の文化担当の方が，2007年に日本に来るインドの25の演奏グループのことを書いた小さなパンフレットを出されました。でも，ほとんど公演も決まっていなかったですよ。決まっていないのに何月と適当に書いているわけです。それで文化担当官は「とにかく長谷川さん，助けて

くれ」と言うわけです。

私も困りましたけれど，安倍首相のそばに寄りまして，チラシをお見せしながら，「昨日の音楽はインドではシャーナイといって，結婚式とか開会式とか明るいときに使う音楽です。この音楽の4公演を私がオーガナイズしていますが，ほんとうにこの先は決まっていないそうですから，秘書官の方にお話ししてもいいですか」と言ったら，「どうぞ」と言われました。そこですぐに秘書官の方にお願いしました。結果，2国間交流で1,600万円が出ました，文化庁から。そのとき，商工会議所で集めた目標3,000万円ぐらいが4,000万円ぐらいになったのかな。それで全部やりました。

国家サイズのイベントは全国民のものでなければと思い，利尻から沖縄の与那国島まで行きました。ほんとうは，1人では足りないです。25のグループですから。でも，ほとんど私がマイクロバスを運転しまして，自炊型でやりました。つまり国家サイズはこうあるべきだということを実践，実録をして，アピールしているわけです。

小日向　ありがとうございました。

5 スポンサー企業との関わりかた

小日向　時間も超過しましたが，お一方のみ質問をお受けできると思います……どうぞ。

質問者　「私」と「公」との連携という話ですが，民間企業に頼るとしたらどのようにつき合えばいいのか，お聞きしたいのですが。

小日向　では，久保田さんからどうぞ。

久保田　そうですね，民間企業は大いに頼るべきだと思います。今，大体毎年インドネシアのアーティストが来ている東北の芸術祭の制作に関わっています。公的機関からの予算もいただいていますが，なかなか難しい。あるとき，インドネシアの村の郷土芸能の人たちを紹介したいということで呼んだのです。めちゃくちゃ寒い東北でどうするという話ですけれども，みんなTシャツしか持っていない，防寒着は一切ない。

でも，そんな防寒着を買う予算はないわけです。そこで，アウトドアメーカーさんと，靴のメーカーさんと，ほかのイベントでけっこう芸術系に協賛していらっしゃる企業に声をかけて，靴などのサイズも全部聞いて，協賛のお願いとともにファックスしました。それでコートと靴と防寒着，手袋とか小物系を提供していただきました。

その企業からは，「この芸術祭は単に物品を提供するだけでなく，ほんとうは長くおつき合いしていくべき企画だと思います」と言われました。で，「ありがとうございます，ぜひぜひ」と言って報告書も送ったのですが，結局，実行委員側のほうでフォローアップし切れていない。もったいないですね。企業からはやっぱりサポートしたいという声は聞きます。スポンサー対応できる人材育成がもっと必要で，そうすればお金以外の支援も受けられる可能性は非常に高いと思います。

小日向　なるほどね……。長谷川さん，「ナマステ・インディア」は企業から協賛金が出ていますよね。

長谷川　750名ぐらいの演者で活気があふれるステージの周りにバナー掲載の形で，インドに進出している大手企業さんがある程度出してくれています。でも，簡単ではなかったです。ときにはインド大使に頼んで，ということもあります。

「ナマステ・インディア」は1口10万円ですよ。しかし，大企業の場合，10万円以上は無理なのです。基本的には，集客が20万人というのは，大企業にとって人数にすらなりません。100万人単位じゃないと。だから，企業にとって私たちは対象外ですよね。ただ，変わってもらいたいというのは，こうした経済優先ですよ。

小日向　なかなか話は尽きないですが，ここで締めさせていただきます。ありがとうございました。

【参考URL】
Manohara「インドネシアと日本をアートでつなぐ」
http://manohara.co.jp/
NPO法人日印交流を盛り上げる会
http://spijcr.mithila-museum.com

（文責　小日向英俊）